

1. 公開シンポジウム「豊かな高齢社会の創出を考える」を実施します！

生涯学習教育研究センターでは、来る3月19日(金)に公開講座「豊かな高齢社会の創出を考える」を下記要領にて実施します。

昨年『案じますな、今じゃ:ひとり暮らしの高齢者26人の語り』(山愛書院)を出版された上杉正幸教育学部教授とともに、「豊かな高齢社会像」について考えます。多くの方のご参加をお待ちしております。

日 時: 2010年3月19日(金) 13:30~16:00
基調講演: 穏やかに たくましく 生きる
~ひとり暮らし高齢者の語りを通して~
講 師: 上杉正幸(教育学部教授)
鼎 談: 豊かな高齢社会像を語る
上杉正幸(教育学部教授)
宮本恵百((財)かがわ健康福祉機構専務理事)
清國祐二(生涯学習教育研究センター長・教授)
会 場: 香川大学生涯学習教育研究センター 第一講義室
参 加 費: 無料
定 員: 50名
申込締切: 3月12日(金)
申 込 先: 香川大学生涯学習教育研究センター事務室
電話 087-832-1273 FAX 087-832-1275
email syogse@ao.kagawa-u.ac.jp

2. 特別公開講座「日本の国宝、仏像をたずねて」 ~徳島大学公開講座をe-learningにより香川大学で受講しました~

当センターでは試験的取組として、Polycomシステムを用いたe-learningにより、徳島大学公開講座を香川大学にて受講する「特別公開講座」を実施しております。

対象となった講座は、徳島大学の人気講座の一つである「日本の国宝、仏像をたずねて」(真鍋俊照、四国大学教授・第四番札所大日寺住職)です。2月2日から3月2日までの毎週火曜日、夜7時から8時半まで、全5回の講座です。今回は試験的取組ということで受講料は無料としたこと、また、このような仏教美術の講座を香川大学では提供していないこともあって、定員50名がいっぱいになるほどのお申し込みをいただきました。

教育学部313教室は、前方にスクリーンが2つ設置されています。写真のとおり、右のスクリーンには講師の真鍋先生、左のスクリーンにはコンテンツ(パワーポイントのスライドや、DVDの映像など)が映されています。

3回目まで終了しましたが、現在までのところ大きなトラブルもなく、順調に進んでいます。次年度以降どのような取組ができるかどうか、今回の試験結果を踏まえながら検討していきたいと思っております。



3. 出張報告～英国を訪ねて～

本年1月に、科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究)を利用してロンドンに出張しました。研究課題名は「冒険遊び場におけるリスクマネジメントに関する研究」です。ロンドンの冒険遊び場(Adventure Playground)はデンマークで始まった冒険遊び場の影響を強く受けて、第二次世界大戦がヨーロッパで終結する頃、戦災跡の廃墟で始まりました。今年で65年を経過することになります。時代は移り変わり、怪我や事故に関する認識も大きく変わりました。遊具等による事故が訴訟につながるようになり、遊び場を継続させるためにはリスクマネジメントが不可欠の要素となりました。



日本の遊び場が思うように広がらないのは、ひとえに責任問題です。子どもたちのためにという善意だけでは遊び場の運営はできないのです。そこで、ロンドンの遊び場から学ぶべきことがたくさんあるだろうということで、現地で観察とインタビュー調査を実施するにいたったのです。この部分を報告してもよいのですが、堅苦しくなりそうなので今回はやめておき、遊び場で「単純に」感じた子どもと子どもを取り巻く環境についてのみ書くことにします。

滞在期間が短かったこともあり、ロンドンプレイという冒険遊び場事務局と遊び場3箇所しか訪問できませんでした。印象的だったのは、ShadwellにあるGlamis Adventure Playgroundです。写真のMarkが私を受け入れてくれました。そこには3人のプレイワーカーが常駐していて、訪問日には子どもは30人程度しかいませんでした。マークによると、そこは貧困問題を抱える地域だそうで、育児放棄(ネグレクト)によって食事を与えてもらえない子どもたちがその時5人ほど遊びに来ていた、ということでした。

イギリスの青少年問題は10～20年ほど日本よりも先を歩んでいます。若年失業の問題、ニートの問題、薬物の問題、どれもいち早く社会の関心を集めて、対策が取られています。日本も確実にイギリスの後追いをしているわけですから、何年後かの日本と重ねて考えると、ぞっとする思いがしました。ただ、それらに正面から取り組むプレイワーカーの存在は心強いものを感じました。(文責:清國祐二・当センター教授)



4. 大学公開講座がはじまった理由～センター担当教員の研究・実践紹介(9)～

明治17(1884)年に当時唯一の大学であった東京大学が「理医学講談会」を開始したことは前々号で述べましたが、これには3つほどの背景があったと思われます。

第一に、海外留学経験を持つ日本人教授たちが、留学先で公衆を対象としたさまざまな科学啓蒙の取組を見聞したこと。海外で行われている活動を日本でも実施しようと考えたことは、想像に難くありません。

第二には、大学の宣伝が急務であったことです。今でこそ大学とは何か、人々は一応の理解をしていると思いますが、明治10(1877)年に設立された当時は、それが何者であるか、社会に役立つものなのかどうか、海のものとも山のものとも分からなかったことでしょう。大学、および、そこで学ぶことのできる西洋型の学問の有用性を、世間に積極的に訴える必要があったわけです。

明治13(1880)年に集会条例が制定され、政治に関する事項を談ずる集会に官公私立学校の教員・学生が臨会・入会することが禁じられたことも、学術講談会というジャンルが確立する一因となりました。政府としては当時盛んだった政談ではなく、国家建設の基礎となる学術へ人々の関心が向くことを望んでいたのです。これが第三の要因です。このような背景によって、我が国の大学公開講座は誕生したのです。

センター雑感

近年、文部科学省が先頭に立って「早寝 早起き 朝ごはん」運動を行っています。家庭の領域(私事)に教育行政(公)が入ることに違和感をもつ人もいるでしょう。一方で、「私の子ども時代はよかった」とうそびえているわけにもいきません。公と私を改めて問い直す必要を感じます。中央教育審議会のテーマも「新しい公共づくり」ですが、さて…(清國)

バックナンバーは下記のWebサイトに掲載されています。是非ご覧下さい。

Tel. 087-832-1273 Fax. 087-832-1275 URL. <http://www.kagawa-u.ac.jp/lifelong/> Email. syogse@ao.kagawa-u.ac.jp